

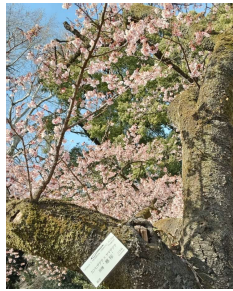
白金藪



SHIROGANEYOSHI



三楯 (2.6)



寒緋桜



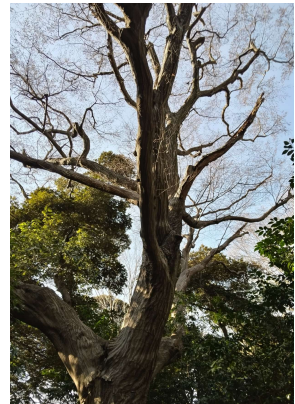
接骨木の芽



シマンチク



楠の青葉



犬四手の萌え葉

杉の花けぶりけぶりて忌いまれをる
 故郷と言ふは持たずも菜飯かな
 包丁の切れ味にぶき糺ぐもり
 ものの芽のそれぞれ秘密抱く如し

璃子 (穴まどひ平 21) 高志選
 " (") "
 (") みち選
 " (") "

定例会(三月の兼題：菜の花、雛祭)

三月二十日(金) アビスタ第三会議室 12〜15

四月十七日(金) アビスタ第一和室 12〜15

五月十五日(金) アビスタ第5会議室 12〜15

二月句会 (26/2/20 兼題：焼藪、春の月) 太字は当日句

光成高志

コンビニにおでんを買って転倒す

朝食の隠し味なる路の藁

東雲しのめや西に春立つ望の月

スーパ-の真中焼藪よく見える

暁の春の三日月寂しけれ

みち

駅を出て人の散らばる春の月

鼻歌の出で早緑の路の藁

頭上よりどつと豆降る鬼は外

昼食に焼芋買って文京区

メタセコイヤの下から仰ぐ春の空

浅野正美

日だまりに群れて咲きをり水仙花

焼き芋の紅くれない天使買い求む

節分会第一声は福は内

福豆を歳の数だけ数え分け
夜明け前差し込む光春の月

佐々木由紀子

春の月くつきり朝の西空に

西空に明るく朝の春の月

焼いもの湯気も頂く三時かな

西空に大きく丸い春の月

山尾万世遊

三山の三山ぶりの春の月

美しく老ゆるとは嘘芋を焼く

名園のゆるき傾斜や春の月

もやひ舟こづき合ひして春の月

瑞竜山海禅寺様甘薯売り

尾崎昇

春の月近くに見えて帰路急ぐ

焼芋や庭の中程煙り立つ

二月や波立つ青き瀬戸の海

寒明けて豆散らばるや庭の隅

登校の子らにはよう小雪舞ふ

171号選句一覽(再録) ○字は選者の頭文字。

黒塗りは特選

田の倉里山や枯野に残る獣道

枯野を駆け巡るのは熊ならぬ猪でしようか。獣道として残っているのを発見したのです。遠く芭蕉の夢に通底していると思います。

④レコードのジャズ聴く一日松過ぎて

⑤元旦や鳩一羽来てこちら向く

⑥初茜何か良い事ありそうな

初春や目目覚め手合せありがとう

⑦金色の屠蘇こそめでた舌の上

読み初めに図書館行きて知を深め

年玉や昔の我に帰りをり

⑧都鳥かくも集めし隅田川

⑨元旦やカーテン開けて日を押む

⑩初筑波二峰尖つてむらさきに

⑪一面観音像に初参り

成願寺頂くお神酒初詣

⑫初場所や取り直しに沸く声援

⑬陽光で新聞読むや冬の蠅

高一棟の団地抜け来て初詣

元旦や元気に起きて顔洗ふ

⑭初神籤それぞれの吉結びけり

はや寒九ウエブサイトにアップせる

⑮初筑波くつきり見えてめでたけれ

⑯賀賀状来る馬の足跡四つ付け

印象に残る賀状だったのでしよう。こちら想像するのが嬉しい。

夜冷えて布団の重さ身に応え

①ほかほかと日差すホームの年始め

初春や神や仏に願ひ事

②初景色ダイヤモンド富士湖面にも

逆さ富士は風や波がなく穏やかに晴れた日にしかみられないことから、縁起が良いとされ、初景色に詠んだものであろう。

③丑寅にあはれ満月ある三日

④備玄関の靴整然と三が日

正月を迎えるにあたつて靴置き場などきれいに掃除をされたこと

⑤満月に木星待る三日宵

待るがいい表現、いいなと思います。

⑥雪少し積り三日の夜明けかな

初場所話題豊富でワクワクす

⑦お雑煮や感謝の気持ち伝えけり

⑧松過ぎと見えぬ人出の浅草寺

奥山の餌なき熊や人襲ふ

172号選句一覧 ○字は選者の頭文字。黒塗りは特選

⑨コンビニにおでんを買って転倒す

⑩駅を出て人の散らばる春の月

⑪日だまりに群れて咲きをり水仙花

⑫春の月くつきり朝の西空に

⑬三山の三山ぶりの春の月

春の月近くに見えて帰路急ぐ
押しボタンの信号待つて冴返る

朝食の隠し味なる露の薑

竈鼻歌の出て早緑の露の薑

選んだ俳人たちは余程露の薑が好きなんだとわかる。早緑が早春の息吹を伝える。さみどりと言ってもいい。

焼き芋の紅天使買いかむ

西空に明るく朝の春の月

美しく老ゆるとは嘘芋を焼く

焼き芋や庭の中程煙り立つ

一瞥べつす大蒜にんにく網に青き芽を

舟東雲しのもや西に春立つ望の月

頭上よりどつと豆降る鬼は外

竈節分分云第一声は福は内

第一声は鬼は外ではない撒く人年女の心が読み取れます。

舟焼いもの湯気も頂く三時かな

焼き芋の甘い美味しさと湯気の匂いまで頂く句に感銘しました。

竈名園のゆるぎ傾斜や春の月

後楽園とか六義園の名園を思い出します。緩い斜面の道から見え出した

赤い春月を愛でているのでしよう。

青き海波立つ瀬戸の二月かな

パラパラとフロント硝子や雨水かな

スーパ―の真中焼諸よく見える

昼食に焼き芋買って文京区

舟福豆を歳の数だけ数え分け

西空に大きく丸い春の月

舟舟もやひ舟こづき合ひして春の月

舟寒明けて豆散らばるや庭の隅

立春の庭の風景がよくわかる。昨夜の節分豆を鬼は外と言って庭に撒いたのです。

暁の春の三日月寂しけれ

メタセコイヤの下から仰ぐ春の空

舟夜明け前差し込む光春の月

朝の月光は春の満月とか弦月でも夜明け前にカーテンの隙間から差し込んでくる。その光に目覚めたのです。

瑞竜山海禪寺様甘薯売り

登校の子らにはおはよう小雪舞ふ

舟冬の空高く舞い上がる若人（冬季五輪

今朝の新聞にスノーボ王国三ツボンの見出し、スノーボードでメダルを取った若人を賛美した当日句。正美さんの自在な目が光る。

俳恣評論論纂

璃子さんの投句されている銀座俳句の選者高橋睦郎

の巻頭作品が載っているというので、みちさんが総合

誌「角川俳句」二月号を買った。昔は俳壇とか俳句研

究という総合誌も時々買って読んでいたが誓子俳句に

触れて頭が混乱するだけなので買うことを止めてもう

何年になるか、この度久方ぶりに中に目を通した。高

橋睦郎の句は言葉からして難しい。題が「溪聲山色」である。まえがきに正法眼蔵第二十五とあり、「溪聲に山色聞けば笑ふなり」の巻頭句を示している。これは蘇東坡の詩である「谿声便ち是れ広長舌、山色清浄身に非ざること無し。夜来八万四千の偈、他日如何が人に拳似せん」から採った言葉。この意味は、溪流の聲はそのまま仏の説法であり、山の景色は仏の清浄な姿そのものである。この昨夜からの八万四千の偈文の経を、後日人にどう話せば分かってもらえるであろうか、というものだ。これから睦郎の句意はどうなるか。溪流に山の景色を聞けば山笑うという季語があるよ、と言っているのだ。そんなに大層なものではありません、春の山でござい、という茶化した、揶揄した句ではなかるうか。二句目の「山是^レ山水是^レ水春おのづから」もたいそうなことを云わなくても春は自然にめぐってきます、というこれも禪の詩偈をもじった句意であろう。こややつて解釈していると、第三句の鶯の音取やけきよきよけきよきよきよ、を漢字で書くのはスルーしたくなる。五十句の後ろの方を読むと、睦郎さん年を召されてぼろぼろになっちゃったという句意の句が並ぶ。ウイキペディアで見ると、私と同じ母子家庭に育って学問には苦労されたらしい。私

は奨学金をもらつてのうのと学生生活を送つて上京したに過ぎない。私のことはさておいて、氏は最近文化勲章を授与された偉い詩歌分野の大家で、私の書きぶりが失礼かもしれない。ごめんなさい。

芭蕉の軽み以後 (122)

光成高志

卯月朔日つたち、御山みやまに詣拝けいはいす。往昔そのかみ、此御山を二荒山ふたらさんと書かきしを、空海大師開基の時、日光と改あらため給ふ。千歳未来をさとりに給ふにや、今此御光みひかり一天にかゝやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖すみか穩おだやかなり。猶なお、憚はばかり多くて筆をさし置きぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光

冒頭の日付は芭蕉のフィクションである。日光という聖地参詣の改まった雰囲気を出すための虚構である。おくのほそ道の本文は芭蕉の紀行文としての文芸作品であるから、同行した曾良の日記と違ってきれいな文になっているのだ。実際には29日に鹿沼に泊まり翌四月一日早朝雨の中、鹿沼を出発、昼前に日光に着き、午後三時過ぎから東照宮に参詣、その夜は例の上鉢石町の五左衛門方に泊まり、翌二日に、朝早くから裏見の滝含満淵がんまがふちを探訪している。従つて、卯月朔日つまり卯月一日に違いないが東照宮の参詣は午後遅い時間である。「往昔そのかみ、此御山を二

荒山ふたらかんと書かきしを、「という書き方など本文の解説をしたら切りがないほど深い背景があり、栗田勇著では氏の得意分野で先に書いた出羽三山の修験道もそうであるが、この辺は私の筆力では到底書き進められない。そこで今まで私が理解したところをランダムにメモして置く。日光と言えはまず東照宮が目につかび、絢爛豪華で知られた徳川家康を祀る神社として有名になり誰もが一度は目にしたいと思うところである。私もみちさんが何回も児童の旅行に付いて行く処なので、母に上京をお願いした時母を案内したところである。母との最後の別れと思っていたので、うきうきした気分は起こらず、暇乞いの言葉が頭を離れず暗い気持ち、暗愁催すなかでの旅であった。私は東照宮の建築をいつも京都桂川河畔の桂離宮と対比して見ているのでなんの感慨も感動も起こらない。むしろ嫌悪する気持ちが起こるので、ざっと見ただけで深く考えようとはしなかった。何年か経って、日光の一泊吟行に参加した折は、東照宮は見ず、中禅寺湖までも上らず、芭蕉も見たという含満淵がんまんがふち縁の石仏群を見た。その川向こうが御用邸記念公園になっておりそこも中に入って見た。さて、いまでこそあづまみちのくと呼ばれた東北も蝦夷と呼ばれた北海道も日本であるが、政治の中心であった大和からみるとずいぶん東

の奥の地方でさぞ田舎であろうと思われたであろう。そこで栗田勇著のこの項を要約気味に簡略してみる。日本書紀の景行天皇の27年の項に、竹内宿禰が次のように上奏したと記されている。「東あづまの夷ひなの中に、日高見国ひたかみのくににあり。其の国の人、男女並ならびに椎結かみわけ、身を文もどろけて（入墨して）、人となり勇み悍こわし。是を總すべべて蝦夷えみしと曰ふ。亦土地あしくに沃壤こえて曠ひろし。撃ちて取りつべし」この文につづいて『常陸風土記』があげられ、「昔は足柄山あしがらやまあし以東はすべて我姫あづまの国と言つてゐたが、大化改新以来、『あづまの道、分れて八の国となり、常陸の国はその一に居れり』とし、「この当時の八国とは関東七か国と陸奥はあづまの北部一国として考えられてゐた」とする。また別の項に、国巢及び佐伯が出てくる。国巢はつちぐも、またやつかしも呼ばれるが、彼らは土窟つちくわの中へ住み、狼また梟の如き性情をもち、慰撫をこぼみ、（略）西方からの新来者または官軍に抵抗したことが書かれてゐる」つまり、土着民の蝦夷えぞ族が、大和政権の軍事力と米作生産力によって、次第に北方へ駆逐され、または大和族に同化して、又は慰撫され、有力な者は国造くにのみやつこや郡司ぐんじのような役について、中央政府の一つの行政区画として成立したものであろう（栗田勇著）。東

国には中央政府に対抗する、人種的また文化的な抵抗感が残っていたと考えられる。後の前九年の役せんねんくわんのえき（一〇五―一〇六二）や後三年の役（一〇八三―一〇八七）はその抵抗感が土地の豪族と都から派遣された武将との戦争という形で現れる。芭蕉が後に平泉で「夏草や兵どもが夢の跡」と詠ったのも陸奥みちのくの長い戦いの後の感慨と見れば、我々後世の読者の感慨もそれだけ深くなる。以前NHKのドラマで藤原経清ふじわらのつねきよを陸奥守兼鎮守府將軍・源頼義が刃こぼれにした刀でこりこり切る場面があつて私は何時までもこのシーンを忘れることが出来なかつた。この藤原経清の家系図によると平将門を撃つた藤原秀郷の末裔で、平泉の藤原秀衡の父であるとか、皆芭蕉のおくの細道の背景につながっているのである。蛇足だけれど書いておきたいのは、私の住んでいる西方1km位に将門神社があつて神を貰いに行く処、初詣には歩いてお参りする。その時いつも将門とか源氏とか私の先祖に思いを致すのである。朝廷が京都に移つた平安時代になると、東国の中央に抵抗する気持ちを抑える文化として本来は外来思想であつた仏教思想が大きく働いた。元来の自然崇拜の風土に新しい都の仏教が組織的に宗教専門者を通して、具体的には天台宗の祖最澄の門弟たち、また真言宗の祖空海の門弟たちが、新鮮で高度な教学と宗教儀礼をそなえて各地に寺院を設けて進出してきたのだ。

陸奥みちのくへの中央権力並びに文化の進出は主だつた地に天台密教の拠点をつくつて展開していった。奥州は山地も多いからそれだけに自然の景観は人々にとつて、時に脅威となりながらも、又恵みも与え、人智人力を超えた尊崇の念を自づからひき起し、自然崇拜にもとづく宗教的心持をはぐくんできていったに違いない。最澄の天台宗、空海の真言宗が精神的理念イデオロギーによる国家像の形成のため、天台、真言宗の優れた宗教家たちが、在来の自然発生的な宗教拠点、その多くが山岳連峰、奇勝秘境に布教を広げていったのである。栗田勇著では、奥州の民族風土、軍記物、奥州の民間信仰と顕密仏教の人脈を詳細に記述されている。これは芭蕉の旅を理解するうえで、ただ歌枕の旅、風流三昧の旅ととらえがちになるのをおそれて、敢えて歌枕の基盤となる風土、歴史、宗教について、すなわち文芸、文化の基盤となるが、これを見逃しがちになる精神文化の要素を、特にみちのくを俯瞰する形でおさえておきたかつたと特記されている。芭蕉の句の一語一句がいかに日本の伝統的言語世界を前提にしているか、それを生み出している人間の精神文化の拡がりをとくに宗門という形でおさえておきたかつたと書かれてある。さて芭蕉の本文の「往昔そのかみ、此御山を二荒山ふたらさんと書かきしを、空海大師開基の時、日光と

改あらため給ふ。」とあるが、此御山は男体山（黒髮山・二四八四m）とその東北に女峰山（二四八三m）がありそれらの峰を観音浄土である補陀落山ふだらくせんとみなして、二荒山ふたらさんの字を当てたと言われる。此の山を「二荒」と称したことについては『日光山滝尾建立草創日記』に「中禅寺の鬼門に当たりて阨穴こうけつあり、名付けて羅刹窟らせつくと云ふ。彼の窟より大風吹き出て寺中並びに民屋を破損すること、一年の内両度に及ぶ、ここに因りて二荒と号せり（原文は漢文）」と記されているとか。林羅山にも二荒山神伝という文があり、二神は夫婦であり、国神と名付け、荒神である。故に山を二荒山という。またその縁起については、男神、女神であり、前者は日本武尊やまとたけるのみこと、後者の女神は橘姫たちばなひめ説を紹介した上で山を二荒れと名付くるは、陰陽二義を象かたどるなり、としている。馬場錦江きんかうの『奥の細通解』には「大楽院秘書諸堂社日記に曰いわく」として前述の日光山滝尾建立草創日記と同様の内容を紹介している。この大楽院は芭蕉が江戸より紹介状をもらって訪れ、その許可を得て東照宮に参詣しているのが、芭蕉はその草創日記の説く縁起を受け止めていたと思われる。以上が二荒山の説明である。次の空海大師開基の時、日光と改給ふ、とあるのは、間違いで、開基正しくは勝道上人（七三

五〇八一七）である。空海は弘仁五年（八一四）、日光山の開山たる勝道上人の偉業と功德を称える「沙門勝道歴山水鑿玄珠碑」を制作した。空海は勝道と面識はなく、勝道と同じ下野国出身の「伊博士」という人物の依頼を承けて制作されたという（九州大学学術情報リポジトリ）。九大の資料にはこの碑文の詳細な論文がウィリアム・マツダ副教授によつて書かれてあり、私は始めの方だけざっと読んでみた。空海の宇宙観・地理感に深く根差した内容となつているとか、その天才ぶりが私の素人頭脳でもうかがわれ、肅然とした。高野山の奥の院に今もおはしますとして毎朝ご飯を運んでいる心がわかる気がした。ここにこんなことを書くのも憚り多くて指を置きます。とにかく勝道上人は二度の失敗にめげず、三度目の天応二年（七八二）にようやく日光山の登頂に成功し、一年後麓の南湖中禅寺湖にたどり着いた。中腹に神宮寺を建て修験道及び神仏習合の道場とした。そこでの修行生活に満足することなく、上人は山上を目指して移住する。37日間日光山の神霊を礼拝したとされる。延暦3年（七八四）再び日光山に登り、弟子たちとともに南湖・西湖・北湖の付近を歩き、南湖（中禅寺湖）に神宮寺を建て、中禅寺を開いた。四本龍寺（現輪王寺）や二荒山神社の創建にも関わったとする伝承がある。勝道上人後、日

光山は比叡山との関係を深める。最澄の弟子にして、下野国都賀郡生まれの天台座主慈覚大師円仁が入唐求法ぐほうをおえて比叡山延暦寺に入山し、いわゆる台密（天台密教）の基礎を確立整備したからである。その後江戸時代に入ると天台宗の天台僧正が出て、家康の厚遇を受けて内外の政策に参画し、黒衣の宰相とまで呼ばれるようになった。天海も、みちのく会津の出身であり、比叡山が京の護りであるならば、日光山を江戸の鎮護の山と考え、日光山を天台の中心霊山に据えようと考えたのである。円仁も後に日光山に入り（八四八）、平泉に開いた霊場に清和天皇が中尊寺の号を賜ったのが貞観元年（八五九）であり、出羽三山の修験道が開かれたのもこの頃とされる。中尊寺は藤原清衡が長治二年（一一〇五）着工し、基衡、秀衡三代にわたって貴族文化の粹を尽くして大寺院となり、大治元年（一一二六）に落慶の大供養を行っていることも、日光東照宮との地縁、人脈のつながりは無縁ではない（栗田勇著）。次の芭蕉の本文の「今此御光みひかり一天にかゝやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖すまみか穩おだやかかなり。」は今までよく問題にされた一行である。今このお山の光は一天にかがやいて、その恩沢は八方にあふれ、すべての民が安穏な生活を送り、おだやかにおさまっている。そのおかげは徳川家

康の御威光であるとか短絡的に考えた風潮もあつて問題とされた。終りの文「猶憚はばかり多くて、筆をさし置きぬ」と共に勝手な解釈が横行した。「あらたうと青葉若葉の日の光」と共に次回に考察する。

俳文広場

① 寂光院 三千院や勝林院がある西側の呂川、律川沿いの盆地と対になる草生川沿いに開けた盆地のどん詰まりにある。この里には、茅葺入母屋造りの農家も見られる静かな山村である。家々は、山を背にし、前の田や畑を望んで建っている。寂光院は推古天皇二年（五九三）に聖徳太子が用明天皇の御菩提のために建てた寺である。初代は太子の御乳人玉照姫である。その後文治元年（一一八五）九月高倉帝の皇后である建礼門院徳子が二九歳でここに入られた。翌年四月に後白河法王の御幸があつた。平家物語や謡曲で有名な小原行幸がこれである。徳子に仕えた阿波内侍は手脚半に前掛け姿で山に薪を取りに行った。その姿を大原の里女が真似て、大原女の原型ができた。私が初めて訪ねたのは四十年前である。近道をしようと田の畦を歩いた。寂光院では、書院にあげられ、尼僧より丁寧な説明があつた。今回は本殿は工事中であり、書院前のハンドマイクによるガイドのみであつた。接する畑に大根を抜いた穴が残っていた。外の門前に漬物石

が何枚も積まれてあった。民家の庭に割烹着が干してあるのが見えた。一輪車にダンボールを乗せて行く農婦の方は、山梨に住む息子さんに宅急便を送りに行くという。私は、寂光院縁起から逃げるようにバスで市内に帰った。(高志…二〇〇五年二月屋根に投稿)

②木曾の森の森林浴 信州木曾上松赤沢自然休養林を歩く森林浴に参加した。今回で五十三回目とか。五十数名の案内人は八十才の男性。かつての森林鉄道に乗り出発地点の森林交流センターからさらに森林深く入って行く。尾張藩の保護のもとに三百年にわたって守られた歴史ある森という。散策コースに入り木曾五木を教わった。檜・翠檜・榎・高野槇・鼠子。三十才もある直立した檜には圧倒された。森林セラピーの話となりフイトンチツドの放出により抗菌効果や香り成分で免疫力向上や心身の癒し効果があるとか。私は何度も深呼吸し五六年分の空気を肺に入れた。理屈抜きで爽快。木曾檜は伊勢神宮の御神体を安置する御桶代木に使用される。平成十七年の御杣始祭で斧入式のあった場所に案内される。三つ紐伐りされた根株の二ヶ所には屋根が設けられている。そこで祭典で歌う木遣歌を習い皆で大声で歌った。木曾の深山で育てたるヨイヨイ／＼日の本一のこの檜ヨイヨイ／＼伊勢の社に納めますエンヤラヨイトセイヨイシヨイシ

ヨ。赤沢一帯は標高千餘、年間通して平均気温は八度で訪れた五月末には柳絮が舞い清流の音は激しく、虎杖の茎は太く、春蟬が鳴いていた。春夏を同時に感じられた森林浴だった。(光みち)

お便り広場

光成様いつもありがとうございます。「白金蔭」171号21冊をお送り致します。この度もありがとうございます。今年も年女ばっかパッカと駆けます。本年もよろしくお願い致します。(116 木戸敦子)。高志おじさん敏子おばさんお元気ですか。この間りんごを送って頂きありがとうございます。とても美味しかったです。感動しました！お返しに蜜柑を買ったので送ります。二人で食べて下さい。まだ寒い日が続きます。風邪など引かないよう体調にお気をつけて下さいね。僕は母と元気に暮らしています。また会える日を楽しみにしています。(120 伸明)。拝啓 毎日寒い日が続きますね。今朝はどこもうつすらと雪が積もっていました。道路は凍みてごこつているので伸明は何時もより一時間位遅れて出勤しました。気を付けてねと送り出しました。私も暖かくして新聞を読みいつもと同じ朝でした。二月に入り地域の交流館のサロンに行き楽しい半日を送りました。一月はなかつたので、一月と二月の人の誕生日のハッピーバースデーツーユー~~~~と私が一人だったのでうれしか

ったのかはずかしさもありましたが、何歳になられましたかと云われ八九才になりましたと云ったら皆んなウオーと言って拍手で祝ってもらいました。長生き出来この場に居る事に幸福を感じあげがとうございまずと頭を下げて感謝でいっぱいでした。友達はまだく少なくなり皆んなデイサービスとか行っています。私はずきないなりにまだ家事をやっているのうれいす。みなさん良くしてもらい元気で暮らせる事にあげがとうございまずと心の中で何時もつぶやいています。寒さが続きますのでお身体十分気を付けて下さい。二月二十三日健三兄の法事に行きます(2.9 幸子。冬季オリンピックの日本人の活躍に感動しています。日差しに春の到来を感じる候となりました。2月投句します(2.14 正美)。光成様 お世話になっております。お待たせしました。「白金霞1く60」を三冊お送り致します。これを元に次のものができるのですね!! 楽しみです。バレンタインのプレゼントです♪(2.14 木戸敦子。光成高志様 敏子様 「白金霞」一月号を送っていただき有り難うございました。表紙のお二人の写真いいですね。いつも若々しいです。両親も午年(昭和五年生まれ)でした。私は一月中旬から体調を崩して寝たり起きたりの生活が続いておりました。その際拝読させていただき強い思いを感じ取りました。二月に入って体調を取り戻しサークル活動にも参加できるようにになりました。ある日突然自分の体が軽くなり以

前のように動くことができびっくりです。久しぶりに畑までウォーキングに行ってきました。フキノトウ露の臺を見つけた。雪が降り積もり雪解けの水分を得て暖かい日差しを受けポトンぽつんと小さな頭をもたげてきたのでしょうか。自然の恵みに感謝しつつ初収穫です。少しばかりですがお送りします。春の気配を味わって下さい。まだまだ寒い日くれぐれもお体に気をつけてお過ごしください。お礼が遅くなりました(2.14 藤田朋子)。

我孫子日記

	1/16	通信句会
	1/17	駅前ク内科
	1/18	* IH&DEPO
	1/19	古谷野皮膚科
	1/30	*2 駅前ク内科
	1/31	*3 新宿ACC
	2/3	*4 節分会
	2/5	古谷野皮膚科
	2/6	*5 小石川植物園
	2/15	*6 コープみらい フェスタきやつ せ物産展in幕張 メッセ
	2/19	古谷野皮膚科
	2/20	句会

*百合鷗廃橋に群れ日向ぼこ

*2 冬晴やクリニツクにて褒めらるゝ

*3 大寒や壁も手許も画面哉(山手線)

行も帰りも動く歩道を春近し

*4 節分会レモンを駕籠に土産として

節分会小袋入りの豆拾ふ(みち)

飛んで来れば駄菓子も拾ふ節分会(リ)

節分会村の檸檬レモンの土産あり(リ)

地に落つるラーメン拾ふ節分会

*5 水打つて蕎麦屋の路地の春めけり (みち)

枯芭蕉悉ことごとく折れ風に揺れ (リ)

敗芭蕉滅多矢鱈の敗れ振り

枯芭蕉宙ぶらりんの実をつけて (みち)

シロガネヨシ名札の立って白穂立つ

枯芙蓉直立枝の先端に

シマダチク細丈高き枯穂立つ

接骨木にわとこの芽の黄の皮の解ほぐれそむ

接骨木にわとこの花芽といふか膨らめり (みち)

旧養生所の井戸の周りの草萌ゆる (リ)

植物園の奥地に咲けり寒緋桜 (リ)

ハンカチの木の実黄緑枯葉中

イヌシデの幹の縦縞枝先萌ゆ

犬四手の幹美しき春浅し (みち)

暖かや甲羅干しの亀がある (リ)

ラクウショウ溜杉気根林立落葉中

榛の木の枯れ実鈴生り崖はげの水

*6 キヤッせてふ欲の埧あつぽぞ春の昼

試供品の列から列へ春の昼

編集後記

白金葎は自然詠ばかり詠むのではと訝いぶかしく思われているかもしれない。そうではありません。毎日の

生活感を大切に季節感を持って生活しております。

今住んでいるこの新木は昔成田線の無人駅の馬の背の畑だったので、今は千戸の住宅地になり周りにコンビニ・スーパー・薬局もある首都圏駅周りの様相になり、便利になりました。ここに越すまでに私は数えたら十回の引越しをしております。生家が丘の松山の中にあつて東西南北見渡せましたので遠くを見るのが好きでした。今の家は前方が開けていて田圃の向うに千葉ニュータウンのビルが見え、西には富士山が遠望されますのですっかり気に入っています。でもいつまで元気でおられるか未来のことはわかりません。今年の本誌15周年記念号を刊行することに専念しようと思つています。スポーツジムを休会にして、歩き&草稿、歩き&草稿・校正をくり返す生活に変えます。

白金葎二月号 (通巻172号) 誌代一部千五百円 (年会費一万五千元)
郵便振込口座一〇五二〇一四二二三六一名義シロガネヨシ令和八年2月23日発行編集発行人光成高志発行所〒270-1119我孫子市南新木2-14-17光成方 投句先・メール又はライン 印刷製本・喜怒哀楽書房〒950-0801新潟市東区津島屋七二九。表紙の題字は嘉悦羊三&2.6の小石川植物園の樹木写真&璃子さんの句集「穴まどび」よりの選句。